

分担研究
□川崎病の疫学に関する研究

柳川 洋

疫学研究班は本年度4種類のプロジェクト研究を実施した。第1のプロジェクトは「川崎病の発症要因に関する患者対照研究」で、柳川 洋、中村好一、菌部友良、今田義夫、麻生誠二郎、原田研介、多田羅勝義が担当した。この研究は、

- ① 川崎病は微生物の感染によって発病する。
- ② 川崎病流行時には同胞も暴露を受けている。
- ③ 発病するものは暴露を受けたものの一部であり、大部分のものは川崎病の症状を全く示さないか、または発熱、咽頭炎などの軽いかぜ様の症状を示す程度である。
- ④ 同胞の中でも前回流行時以降に生まれたものからの発生率が高い、という4つの仮説を検証する目的で実施するもので、日赤医療センター、日大板橋病院、東京女子医大第二病院で、症例の収集を開始した。他の研究班関連施設にも参加を呼びかける予定である。

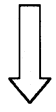
第2のプロジェクトは「第10回川崎病全国調査」で柳川洋、中村好一が担当した。1987年1月-88年12月の2年間に全国100床以上の病

院を受診した患者を対象とした調査で、1989年3月末日現在1,438施設から調査票の回収があった。

第3のプロジェクトは「川崎病のサーベイランス」で柳川洋、中村好一が中心になって本年度も継続した。この研究は、迅速な流行の認知を目的として、全国147施設から毎月患者数を報告してもらっている。1988年12月で5年間継続したことになる。本年度はまったく流行の兆候はみられなかった。

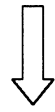
第4のプロジェクトは「ガンマグロブリン療法に関する研究」で、古庄巻史が中心になって16施設の共同研究として、冠状動脈障害の出現を予防することを目標にガンマグロブリン療法の評価を行った。

個別研究として、中村好一は「川崎病心後遺症の発生頻度の時系列変化」、「川崎病死亡例の研究」、「世界における川崎病発生状況」などの研究を実施した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昭和 63 年度厚生省心身障害研究

「川崎病に関する研究」

分担研究

川崎病の疫学に関する研究

柳川洋

疫学研究班は本年度 4 種類のプロジェクト研究を実施した。第 1 のプロジェクトは「川崎病の発症要因に関する患者対照研究」で、柳川洋、中村好一、園部友良、今田義夫、麻生誠二郎、原田研介、多田羅勝義が担当した。この研究は、

川崎病は微生物の感染によって発病する。

川崎病流行時には同胞も暴露を受けている。

発病するものは暴露を受けたものの一部であり、大部分のものは川崎病の症状を全く示さない、または発熱、咽頭炎などの軽いかぜ様の症状を示す程度である。

同胞の中でも前回流行時以降に生まれたものからの発生率が高い、という 4 つの仮説を検証する目的で実施するもので、日赤医療センター、日大板橋病院、東京女子医大第二病院で、症例の収集を開始した。他の研究班関連施設にも参加を呼びかける予定である。

第 2 のプロジェクトは「第 10 回川崎病全国調査」で柳川洋、中村好一が担当した。1987 年 1 月 - 88 年 12 月の 2 年間に全国 100 床以上の病院を受診した患者を対象とした調査で、1989 年 3 月末現在 1,438 施設から調査票の回収があった。

第 3 のプロジェクトは「川崎病のサーベイランス」で柳川洋、中村好一が中心になって本年度も継続した。この研究は、迅速な流行の認知を目的として、全国 147 施設から毎月患者数を報告してもらっている。1988 年 12 月で 5 年間継続したことになる。本年度はまったく流行の兆候はみられなかった。

第 4 のプロジェクトは「ガンマグロブリン療法に関する研究」で、古庄巻史が中心になって 16 施設の共同研究として、冠状動脈障害の出現を予防することを目標にガンマグロブリン療法の評価を行った。

個別研究として、中村好一は「川崎病心後遺症の発生頻度の時系列変化」、「川崎病死亡例の研究」、「世界における川崎病発生状況」などの研究を実施した。